「ひょうごつまずきポイント指導事例集に係る授業改善と
読書活動推進加配教員としての図書館教育の推進」

明石市立魚住東中学校
主幹教諭　山端　早百合

1　全国学力・学習状況調査に見られる兵庫県のつまずきの解消に向けての取組

（1）取組の内容・方法

１年・・・「芸術作品の鑑賞文を書こう。」

（目標）芸術作品を鑑賞し、自分が選んだ絵の魅力を鑑賞文で伝える。その過程で、類義語辞典や国語辞書、パソコンを使って類義語を調べ、言葉に対する興味を持ち、語彙を増やす。

（成果）・言葉の多様性や奥深さに気づくことができた。
・自分の語彙数の少なさに気づき、言葉に関心をもつことができた。
・辞書やパソコンを使って、意欲的に類義語を探すことができた。

２年・・・「対義語辞典を作ろう」

（目標）資料（主に国語辞典）を使って、対義語辞典を作成することを通して、言葉に対する興味を持ち、語彙を増やしていく。

（成果）・目的に応じた資料（対義語辞典・類語辞典等）を選択することができるようになった。
・例文を考え互いに推敲することで、新しく得た知識（言葉）を適切な使い方で表現しようと意識できるようになった。
・辞書に対する興味が深まり、意味以外の対義語や類義語、用例までを意識し、記入するようになった。

３年・・・「ことわざカルタを作ろう」

（目標）慣用句やことわざに関する知識を広げ、「伝統的な言語文化」の一部としての意味を知り、普段の生活の中に活用していけるよう、語彙を豊かにすること。

（成果）・ことわざを使うことによって、自分の思いを豊かにわかりやすく伝えるが出来るとわかった。
・絵や吹き出しを作ることで、ことわざを身近なものと感じられた。
・曖昧に覚えていたものや思い込みで使っていたものを正しく理解し使えるようになった。

全学年・・・語彙力向上プリント「ことのは」

（目標）語彙をふやし、表現活動に活かしていくことができる。

（成果）・辞書を使い、言葉の意味調べや用例を記録していく中で、少しずつ正しい使い方が理解できるようになっていった。
・選択した語句を使い空想作文を創作することは楽しみにしており、「書く」ことへの抵抗感が減っていった。

（2）取組の成果

①ひょうごつまずきポイントの実践事例を作成するにあたり、指導内容やつまずきが予想されるところの指導の工夫を行った結果、生徒たちの主体的・協働的な学びの姿が見られた。また、言葉に対する興味やそれを日常の表現活動に活用しようとする意識が高まった。

②語彙力向上プリント「ことのは」は、今年度から全学年で実施されることになり、「書く力」

を系統立てて伸ばす手だてを３学年通して教える体制ができた。

③「ことのは」の作文は、担当者がＡＢＣ評価に加えて、各自の作文に励ましのコメントを書くことによって、書く意欲はついてきた。また全体共有の時に仲間の書いた「文章名人」を読み参考にしていた。逆に、間違った使い方をしている文を全体で確認し、正しい使い方を提示することによって、言葉の感覚が磨かれていった。

「ことのは」の取組については、８月の実践発表以来、他校からの問い合わせもあり、本校以外に、東播地区の学校に少しずつ広がりを見せていることはうれしいことである。

（３）課題及び今後の取組の方向

①「言葉」や「書く」ことに対する意識は向上したものの、質的な向上はまだ不十分である。

＜そのための手立て＞

・獲得した語彙を短作文やスピーチなどの表現活動につなげるための手だて
・推敲するための観点の明確化
・班活動における班内の役割分担
・「質問力」の鍛え方
・評価の仕方　（　効率化も含めたよい評価法があるのか　）

②国語科の学びを９年間で育てていく方向で**小中連携の取組を**していきたい。

＜そのための手立て＞

・各学年の年間指導内容を互いに知ることで、重複事項を減らし、応用のための時間に使う。
・話型の引き継ぎをし、授業規律をつないでいく。
・系統立てた「書く」取組の実践を行う。
・「辞書」の活用を小中共通して行う。
・読書活動の推進を小中で行う。
・今後も「ひょうごつまずきポイント指導事例集」の活用を推進し、市内や東播磨地区の先生方と共に、授業改善を行う研修の場づくりが必要である。

２年生　「対義語辞典を作ろう」

２　読書活動の推進

（１）取組の内容・方法

「読書センター」と「学習・情報センター」としての機能を果たしていけるように、推進教員が中心となり、「読書活動の推進」を図ってきた。その結果、図書館利用率が大幅に上昇し、図書

の稼働率も高まっている。しかしながら、視聴覚教育部の協力のもと、大型テレビとノートパソコン、プリンターを設置し、調べ学習等に利用しやすい環境を整えたが、授業での活用はたいへん少なかった。また、図書館に対する職員の関心も低いと思われる。そこで、今年度は、読書センターとしての機能に加え、学習センターとして環境を整備し、授業での活用や調べ学習用の図書の提供方法を紹介し、職員に対しての啓発を図っていった。また、教職員が図書館に足を運ぶ手だてを行い、図書館への関心を高めていった。

学校図書館を活用した授業実践

『ビブリオバトル（知的書評合戦）』

～　私のおすすめの１冊を紹介しよう　～

学級ビブリオバトルの様子

学年ビブリオバトルの講評（明石市立図書館館長）

【　学級ビブリオバトルから学年ビブリオバトルまでの流れ　】

・「おすすめの１冊」を決め、スピーチ原稿を作成する。
・班内発表会を行う。相互評価を行う。
・班代表６名によるスピーチを聞く　＊本（特に表紙）が見えるように、書画カメラを使い拡大する。
・どの本が一番読みたくなったかの投票を行う。学級代表の決定。
・学年全体のチャンプ本は決定せず、ビブリオトークとする。
＊学年ビブリオバトルでは、プロジェクターを使い表紙を拡大し、視覚的にも興味を持たせた。
＊学年ビブリオバトルの時に、明石市立図書館の館長さんにきていただき、講評していただいた。
・明石市立図書館と連携を図り、後に各クラスの班のチャンプ本に選ばれた本を複数冊と同作者の他の作品を“集団貸出”してもらった。

【　取組の成果と課題　】

○ビブリオバトルという形式をとることによって、スピーチへの意欲が高まった。
○読書への興味関心が高まり、図書室への来館者数・貸出冊数が伸びた。
○明石市立図書館との連携を図ることができた。また学年代表２名がひょうご子ども読書活動推進フォーラム播磨東地区のビブリオ大会に参加した。
△スピーチ力の差が大きく、今後も機会を増やし、慣れていくことが必要である。
△スピーチの内容を深めるため、質問力をつけることが必要である。

【　学校図書館とのかかわり　】

教室から離れ、図書館という本に囲まれた空間で行うことによって、「ビブリオバトル」に集中することができた。また、図書館には、大型テレビが設置されているため書画カメラと接続して、表紙や本のページを拡大して見せることも可能になった。

本だけでなくパソコンやテレビなどを常時設置しておくことは、「学習センター」としての機能をより効果的にしている。

（２）取組の成果

・読書活動の推進を、学校全体に広めるために行った取組が効を奏し、魚住東中学校の図書館を「見て、使う」ことが増えた２年であった。

特に、担任の先生は、学期ごとに「学級文庫」の選定を学級図書委員と一緒に行ってもらい、足を運んでもらった。それ以降、学級の生徒がどのような本を読んでいるか興味を持つようになり、教師も同じシリーズの本を読む姿が見られた。

・図書館のレイアウトや図書の配架については、明石市読書推進課の職員の方にアドバイスをいただきながら、図書委員の手によって行っていった。作業をしながらお互いが本のことを話す姿があり、委員自らの読書意欲が高まったようである。

・生徒たちは、図書委員会の仕事を主体的に協同的に行うことでやりがいを感じている。学期ごとに改選される委員選挙で、図書委員のリピーターは多い。

・学校図書館を使った授業は、国語科は３学年にわたり実施され、その他英語科（１年生）や総合学習（２年生）で実施された。常時設置されているノートパソコンやプリンター、大型テレビも活躍した。

・昼休み 10 分間だけの開館であるが、毎日たくさんの生徒が来館し、利用者数の大幅増加が見られた。

（３）課題及び今後の取組の方向

読書推進事業が今年度で終了するが、2 年間だけの一時的なものに終わらせることなく、今後も「図書室に行けば人がいて、魅力ある本がある」といった環境が維持できることが大切である。そのために、まず、図書館業務をチームとして取り組んでいくことである。特に図書のデーター管理や更新の仕方などは、図書館の心臓部といえる部分であるので、複数の職員が関わっていくことによって、スムーズな図書館運営を測っていくことができる。

次に、図書委員の主体的な動きを作ることである。図書の配架や書架のレイアウトなど、生徒に委ねることによって、「どこにどんな本があるか」を委員自らが知り、生徒から生徒への口コミによる「本の紹介」が行われていった。教師からの紹介よりも、同世代のおすすめによる方が共感を得られるのかもしれない。

三つ目は、学校図書館を使った授業は、今年度増えたとはいえ、まだまだ偏りがある。年度当初に各教科で必要とする図書の選定を行ってもらい、年間授業計画に組み込んでいただく取組が必要である。公共図書館との連携によって、調べ学習に必要な本をそろえる手だてがあることなど、もっと教職員に広めていくことが必要である。

最後に、読書活動は、生涯にわたって行われる活動である。そこで、もっと地域の図書館のサービスを利用することによって、公共図書館を身近な施設にしていきたい。そのために、外部講師として「読み聞かせ」や講演会の講師として招聘していきたいと考えている。